

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23320110

研究課題名(和文) 大学学部留学生のための講義の談話に関する研究

研究課題名(英文) Research on the discourse of university lectures for the purpose of improving international undergraduate students' comprehension

研究代表者

佐久間 まゆみ (SAKUMA, Mayumi)

早稲田大学・日本語教育研究科・教授

研究者番号：30153943

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,700,000円、(間接経費) 4,410,000円

研究成果の概要(和文)：大学学部留学生による日本語の講義理解の問題と要因、解決策を探るために、3種の人文学系講義の表現特性を分析し、受講者の理解調査の結果との関連を分析した。

表現分析では、14種の講義の「談話型」(尾括型2例、両括型3例、中括型9例)を分類し、「日本語機能文型」の検索結果から、学部留学生の講義理解には、初級・中級文型からなる複文と話段の習得が必要なが確認された。

理解調査では、日本人学部学生と中国人・韓国人留学生のノート、要約文、インタビューにおける3種の講義の「情報伝達単位(CU)」の残存傾向から、留学生は具体例や専門語に着目し、講義の談話型の把握が困難なが検証された。

研究成果の概要(英文)：In order to explore the causes of and solutions to international undergraduate students' problems comprehending lectures, we analyzed the expressions in 3 humanities lectures, and their relation to results of comprehension-related surveys.

We classified each lecture into a 'discourse type' (final unifying type:2, initial and final unifying type:3, middle unifying type:9), and results of a 'Japanese functional sentence pattern' search of 14 lectures showed that international students need to acquire elementary/intermediate pattern-based complex sentences and identify wadan 'grammatico-semantic paragraphs'.

A comparison (based on 'communicative units' (CU)) of Japanese and Chinese/Korean international students' use of lecture information in 3 comprehension surveys (lecture notes, summaries, interviews) showed that international students focused on specific examples and technical vocabulary, and could not grasp the discourse type (overall structure) of the lectures.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：講義の談話構造 「情報伝達単位(CU)」 「日本語機能文型」 「話段・文段」の多重構造 学部留学生の講義理解 受講ノート 要約文 インタビュー

1. 研究開始当初の背景

(1) 日本語の講義の談話研究

日本語の講義の談話分析の必要性

従来、日本の大学の講義研究は、大学教員の授業評価や講義の技術向上を図る応用研究として展開されてきたため、講義の評価や表現技術に偏っており、日本語の講義の談話分析に関する問題意識が希薄で、講義者と受講者の双方向性の強いコミュニケーションによる独話としての講義の談話の表現特性の解明が不十分であった。

講義の談話の構造分析

講義とは高度な専門的知識を主に音声言語で伝達する行為であるが、長くて情報量の多い講義の表現と理解の解明には、談話の構造分析が不可欠である。

講義の談話の表現分析

講義の談話の表現特性の分析方法については、佐久間編著(2010)で、講義の談話構造を記述するのに有効な、「情報伝達単位(communicative units、以下、CUと略称する)」と「話段」という2種の分析単位を設定して、日本語の人文系講義の「談話型」を解明し、講義の談話の表現特性を分析した。

また、日本語教育に応用するために、本研究で録画・録音した講義資料における「日本語機能文型」の使用傾向を調査した。

(2) 日本語教育の講義理解の実態把握

日本語教育の分野では、従来、講義が聴解指導の中で扱われてきたが、必ずしも受講者の理解の実態を踏まえたものではなかった。そのため、講義の談話の構造類型や表現特性と受講者(大学学部の日本人学生と外国人留学生)の講義理解の実態との関連を把握し、大学学部留学生の講義理解のための教材と教授法の開発が要請されている。

2. 研究の目的

留学生 30 万人受け入れ計画に伴い、日本国内の各大学における学部留学生の大幅な増加が見込まれている。本研究の主な目的は、大学学部留学生による日本語の講義理解に関して、以下の二つの観点から、問題と要因を解明し、講義の理解力を向上させるための効果的な方法を提示することにある。

(1) 講義の表現面の分析

「情報伝達単位(CU)」と「日本語機能文型」に基づき、講義の「話段」と「談話型」を分析し、講義の談話の表現特性を解明する。

(2) 講義の理解面の分析

大学学部の中国人・韓国人留学生と日本人大学生対象の3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー)の分析結果を講義の談話分析から検討し、問題点と解決法を考察する。

以上の結果を踏まえて、学部留学生の講義理解教育のための日本語機能文型と文章・談話型に基づく教材と教授法を提案する。

3. 研究の方法

日本語の人文系講義の談話資料における「文」・「節」、また、本研究で独自に設定した「情報伝達単位(CU)」と「日本語機能文型」に基づく「話段」と「談話型」を分析し、「中心文」と「主題文」の「日本語機能文型」を解明する。

また、上級日本語学習者の中国人・韓国人留学生と日本人大学生による3種の人文系講義の3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー等)の結果について、講義の「原話残存認定」を実施し、学部留学生による日本語の講義理解の問題と要因を分析し、その解決方法を考察する。

(1) 3種の人文系講義(A,G,H)の分析

2種の講義(G,H)の談話構造と表現特性を主に、「話段」と「中心文」から分析する。講義Aは佐久間編著(2010)で分析してある。

講義(G,H)の「主題文」と「中心段」を分析し、「談話型」を認定する。

(2) 3種の講義(A,G,H)の理解調査における

原話の「情報伝達単位(CU)」の残存傾向の分析
日本人大学生 33 名と学部留学生 36 名(中国人 25 名、韓国人 11 名)を対象に、講義Aの録画による理解調査を1回実施する。また、日本人大学生 72 名、中国人留学生 63 名、韓国人留学生 63 名を対象に、新たに収集する2種の講義(G,H)の理解調査を4回実施する。大学生と留学生から、3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー等)のデータを収集して、結果を分析し、相互の関連を検討する。

3種の講義(A,G,H)の受講ノート(AN,GN,HN)、要約文(AI,GY,HI)、インタビュー(AI,GI,HI)によるデータの「情報伝達単位(CU)」を認定し、原話(A,G,H)の「情報伝達単位(CU)」の残存認定を行う。パワーポイントのスライドを用いた講義Gは、スライドのCUを認定して、3種の理解調査の残存認定を行う。

上記の「原話残存率」の統計的検定を行い、講義(A,G,H)の談話の重要な情報を表す文の「情報伝達単位(CU)」と「日本語機能文型」を認定する。

(3) 受講ノート(AN,GN,HN)による過程的理解

の諸相と、要約文(AI,GY,HI)とインタビュー(AI,GI,HI)による結果的理解の諸相を比較する。

(4) 3種の講義(A,G,H)の原話(映像・テキスト

ファイル・情報伝達単位)、3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー)のデータを電子化して、集団と個人別のデータ検索を可能にするデータベースを構築する。

(5) 日本人大学生の理解調査から認定された

講義の重要な情報を表す「情報伝達単位(CU)」と中国人・韓国人留学生の調査結果を比較して、学部留学生の講義理解の問題と要因を把握し、解決策を検討する。

4. 研究成果

大学の講義は教員・学生の双方にとって、身近で切実な問題であるにもかかわらず、講義の談話が日本語学の研究対象となることは少なかった。

佐久間編著(2010)では、講義の談話の表現特性を分析し、日本人大学生を対象とした受講者の講義理解の実態解明に着手したが、なお多くの課題が残されていた。特に、講義者が長時間話し続ける講義の開始・継続・終了という談話展開が把握できないと、受講者は、講義内容の要点をノートに取り、講義全体の趣旨を正確に理解することができない。

本研究では、講義の談話の展開的構造を動態的に把握するのに有効な、4種の「分析単位」(1.「談話型」、2.「話段」、3.「情報伝達単位(CU)」、4.「日本語機能文型」)を用いて、受講者が講義の談話展開を過程的に理解する実態把握が可能なことを検証した。方法論としては、文章理解の要約文研究で得られた知見を講義の談話の表現と理解の分析に導入して、講義の「分析単位」と「談話展開」という二つの観点から、講義の表現特性と受講者の理解の諸相を記述した。

(1)「談話型」による講義の談話展開

講義の「談話型」(談話構造類型)とは、佐久間(1987)で提案した「話段」の統括機能に基づく大小の話題が多重に展開する全体的構造の類型であるが、佐久間編著(1989)の要約文研究の「文章型」(文章構造類型)と同様に、文章・談話の「主題」を表す「中心段」の出現位置と頻度による6種類(頭括型・尾括型・両括型・中括型・分括型・隠括型)がある。最も高次の「大話段」(. 開始部、 . 展開部、 . 終了部)からなる講義の「談話型」は、14種の人文学系の講義に、「尾括型」2例、「両括型」3例、「中括型」9例の3種が認められた。

講義の談話は時間の経過とともに展開するが、受講者は、接続表現や指示表現等を手掛かりに講義の「話段」のまとまりを捉え、講義の「談話型」の理解を、受講ノートと要約文の「文章型」やインタビューの「談話型」として再生する。講義の「談話型」とは、「大話段」を構成する「話段」、「情報伝達単位(CU)」、「日本語機能文型」等から認定される講義の全体的構造の類型である。

3種の講義(A「尾括型」、G「両括型」、H「中括型」)の具体的な分析を通して、講義の「談話型」とは、受講者の講義理解の諸相を講義の表現特性と関連付けて解明する際の、有効な分析観点となることが確認された。

(2)「話段」による講義の談話展開

「話段」とは、佐久間(1987)の提唱する談話の構成要素で、文章の「文段」に相当する言語単位である。話段の相対的な内容のまとまりは、1対の「提題表現」と「叙述表現」からなる「題-述関係」の表す話段の「話題」

を統括する「中心文」と談話全体を統括する「大話段」の「主題文」によって示される。ある話段の中心文が他の話段をまとめて、大話段を形成し、相互に統括し合うことにより、講義の談話における話段の多重構造が生じる。(1)の講義の「談話型」を決定する「大話段」の構成要素である「話段」は、講義内容の「話題」を表し、下位単位の「小話段」も「小話題」を表す。

3種の講義(A,G,H)の「話段」の多重構造を、南(1983)の「談話の単位認定の手がかり」を参考に分析した。また、受講者の理解を表す要約文とインタビューのデータから、受講者が話段を単位として講義内容を把握していることを確認し、論理的には対等のレベルにあるはずの原話の話段が、内容の抽象度や接続表現の違いなどから複数の解釈を許容する場合、受講者の話段の理解に揺れが生じる傾向が認められた。

(3)「日本語機能文型」による講義の談話展開

「日本語機能文型」とは、早稲田大学日本語教育研究センターで1999年より教材として開発された、「日本語教育における学習項目の中核に位置して、文章や談話を構成する様々な文のしくみとはたらきを学習者に効率よく習得させるための定型表現」(佐久間2006)のことである。講義に使用された「日本語機能文型」を分析する意義は、日本語教育の文型シラバスが講義理解に妥当かどうかを検証する、講義者の講義の個性やスタイルを捉える指標となりうる、講義の談話展開のマーカ―を把握する際の基礎資料となること等にある。

14種の人文学系の講義における文型の使用頻度の調査を通して、初級・中級文型に加え、「ですね(間投助詞)」「というふうに(引用形式)」等の講義の談話に特徴的な高頻度の文型の習得が、講義理解に不可欠なことを示した。また、「てください」「ね」「ちゃう」等の使用頻度に個人差のある文型の選択傾向が、講義者の個性や講義のスタイルを示すことが明らかになった。講義の談話展開を担う文型として、「話段」の境界に特定の文型(話段開始文の「たいと思う」「ていく」、話段終了文の「ようだ」「てくる」など)が使用される傾向が認められた。

(4)「情報伝達単位」による講義の談話展開

「情報伝達単位(communicative units、以下、CUと略称する)」とは、佐久間編著(2010)で、日本語の文章と談話の情報伝達度を測る尺度として、講義の原話と理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー)のデータの分析に用いた全16類30種の「分析単位」である。「情報伝達単位(CU)」は、佐久間編著(1989)以降の要約文研究で分析単位としての有効性が検証された「原文残存認定単位(ZT)」を元に、講義の談話特有の複数の単位を加え、再編成したものである。受講者が講義のどんな

表現をどのように理解して再生するのかを数値化し、講義の談話展開を担う重要な表現を検証することを可能にするものである。

形態と意味の両面から認定される「情報伝達単位(CU)」の分類基準と認定方法を確定した。この単位は、講義の最小の構成要素の単語や文節を、より上位の節や文、話段、文章・談話の全体へとまとめていく動態的な分析尺度として有効であることが、講義の理解調査の結果から検証された。

(5) 日本語の講義の談話分析の成果を日本語教育の実践に応用する可能性

講義の表現と理解に関する情報提供と意見交換を行い、以下のような知見が得られた。

講義の表現分析では、展開と運用を重視する「談話型」と「日本語機能文型」、および、単位と構造を重視する「話段」と「情報伝達単位(CU)」という両側面から総合的に分析することにより、講義の談話展開の表現と理解の諸相を解明しようということが確認できた。特に、本研究で独自に開発したCUの機能について、南(1983)の「フリ」や「話題」等の分析観点を付与する可能性が見出された。

講義の理解分析では、講義が理解できない外国人留学生やノートが取れない受講者に対して、本研究の成果をどのように活用するかについて、日本人大学生と中国人・韓国人留学生を対象とした3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー)の分析結果から、講義の談話展開の表現特性と講義理解の実態把握との関連が解明されたことにより、日本語教育における講義理解のための教材開発や教授法への応用可能性が見出された。

(6) 本研究初年度の平成23年度には、講義理解の基礎的データの収集と整備のために、次の～を実施した。

日本人大学生33名と外国人留学生36名(中国人25名、韓国人11名)を対象とする講義A(60分間)の理解調査を7月に実施し、3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー)のデータを追加収集した。

新たに人文学系の2種の講義(G,H)(90分間)を10月に収集して、日本人大学生23名と外国人留学生25名(中国人12名、韓国人13名)による3種の理解調査(受講ノート、要約文、インタビュー)のデータを収集した。

で収録した鮮明な映像と音声による講義(G,H)の録画を用いて、2月に日本人大学生49名の3種の理解調査のデータを追加収集した。

前年度までに収集した12種の講義(A,B,C1,C2,C3,D,E1,E2,E3,F1,F2,F3)と新規に収集した2種の講義(G,H)の文字化資料の表記基準を統一した。

3種の講義(A,G,H)の原話と3種の理解調査のデータの分析単位として、「文」「節」「情報伝達単位(CU)」「文段」「話段」「文章型」「談話型」の認定を行うとともに、各単位の

認定基準の一部を改訂した。

講義の談話の表現特性を分析するために、「日本語機能文型」の分類と記述方法の一部を変更したデータベースを検索し、全14種の講義における「日本語機能文型」の学習段階(1~8)別の出現傾向を分析した。また、「節」や「情報伝達単位(CU)」等の他の分析単位との関連について検討した。

3種の集団による3種の理解調査のデータの文字化資料を作成し、各データの分析方法と相互関連について検討し、次年度以降の本格的な理解調査の実施に向けて、データの分析方法と作業分担を決定した。

(7) 本研究2年目の平成24年度には、大学学部留学生による人文学系講義の理解の問題を解明し、その解決策を検討するための各種データの整理と調査結果の分析をした。

2種の講義(G,H)の3種の理解調査を7月と10月に実施して、大学学部の中国人留学生51名(21名、30名)、および韓国人留学生50名(21名、29名)のデータを追加収集した。

前年度に収集した講義Aの3種の理解調査のデータにおける講義Aの原話の「情報伝達単位(CU)」による残存認定を行った。

の結果に基づき、講義の「過程的理解」(受講ノート)と「結果的理解」(要約文、インタビュー)という、受講者の理解過程の総合的な記述が可能になり、「話段」や「談話型」との関連が明らかになった。

3種の理解調査のデータの比較から、日本人大学生と外国人留学生による講義理解の実態を把握した。

講義の談話における「話段」の多重構造について、原話の表現特性と受講者の理解調査の結果から検証する方法を再検討した。

講義における学習段階別の全799項目の「日本語機能文型」の使用傾向から、外国人留学生の講義理解の問題と要因を解明した。

(8) 本研究最終年度の平成25年度は、本研究のまとめに向けて、～を実施した。

2013年度日本語学会秋季大会(於：静岡大学)で、ワークショップ「講義の談話の単位と展開」を主催して、研究代表者の佐久間と研究分担者の石黒(司会)・渡辺・宮田・宮澤の計5名が各自の分担した4観点から、「講義の談話展開」を話題提供し、会場の参加者たちとの有益かつ活発な情報交換を行い、「予稿集」および「要旨」をまとめた。

平成23年度~25年度の研究成果の一部を『資料集』(pp.1-308)として印刷製本し、研究代表者の佐久間と研究分担者の石黒・宮田・宮澤・藤村、研究協力者の鈴木・田中の計7名が各自の課題に関する分析を報告した。

研究代表者らによるこれまでの講義理解研究において、外国人留学生の講義理解の問題点として指摘されてきた、具体例や専門語等の細部に着目するが、講義の「話段」と「談話型」の全体的構造の把握が不十分だとい

問題が、本研究の調査結果からも追認された。また、本研究で新たに追加した受講後のインタビュー調査により、日本人大学生と外国人留学生による講義理解の実態と諸相がより正確で具体的に記述できるようになった。

平成 23 年度～25 年度の研究成果の一部を研究分担者の石黒が編集し、の「予稿集」の原稿を再録し、また、研究分担者 3 名と研究協力者（国内・海外）6 名による『論文集』（pp.1-146）として印刷製本した。

で指摘した外国人留学生の講義理解の問題解決には、講義の談話構造と表現特性の分析が不可欠であるが、『論文集』に取り上げられた「日本語機能文型」、「メタ言語表現」、「接続表現」等の解明により、講義理解のための教授法や教材開発に対する示唆が得られた。

平成 23 年度～25 年度の研究成果と調査結果の全資料を電子媒体の形で作成した。

3 種の講義(A,G,H)の 3 種の理解調査のデータの統計的検定を行い、その結果を分析して、『資料集』と『論文集』に、の資料の一部を掲載した。

過去 3 年間にわたる本研究の実績報告を確認し、今後の検討課題について整理した。

特に、3 種の講義(A,G,H)の録画を用いた 3 種の理解調査の中で、現在、未処理のデータに関しては、今後も、データの分析と結果の考察を継続し、講義理解の教材開発等も遂行して、授業実践を重ねた結果を踏まえて、内外の学会等で公開していく予定である。そのための経費を確保するために、2014 年度の早稲田大学の「特定課題 A」の研究助成を受けて、本研究の課題を継続し、論文・著書・教材出版等により発信していく準備を進めて、新たな講義理解研究の進展を図る所存である。

【参考文献】

- 佐久間まゆみ(1987)「『文段』認定の一基準(1) 提題表現の統括」『文藝言語研究 言語篇』11、pp.89-135、筑波大学文芸・言語学系
- 佐久間まゆみ(研究代表者)(2006)『「日本語機能文型」教材開発のための基礎的研究』早稲田大学日本語研究教育センター2005年度重点研究 研究成果報告書
- 佐久間まゆみ編著(1989)『文章構造と要約文の諸相』くろしお出版
- 佐久間まゆみ編著(2010)『講義の談話の表現と理解』くろしお出版
- 南不二男(1983)「談話の単位」国立国語研究所(編)『日本語教育指導参考書 11 談話の研究と教育』pp.91-112、大蔵省印刷局(1)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 9 件)

石黒圭「講義の談話における『が』『けれども』の用法」『一橋大学国際教育センター紀要』5号、2014年、pp.3-14、査読有
石黒圭・佐久間まゆみ・渡辺文生・宮田

公治・宮澤太総「講義の談話の単位と展開(日本語学会 2013 年度秋季大会ワークショップ発表要旨)」『日本語の研究』10 巻 2 号、2014 年、pp.95-97、査読有

宮田公治「指定タイプの「～ことだ」文の主語となる名詞」『松蔭大学紀要』15 号、2013 年、pp.83-92、査読無

田中寛「限定的評価判断の表現 「だけに」「だけあって」などをめぐって」『語学教育研究論叢』30 号、2013 年、pp.131-151、査読無

田中寛「複合辞からみた条件表現の周辺 「(ない)限り」「だけで」「次第で」などに関して」『大東文化大学外国語学会誌』42 号、2013 年、pp.163-176、査読無

鈴木香子「配布資料から見る講義の談話構造と受講生の理解」『指向 日本言語文化学・応用日本語学論究』10 号、2013 年、pp.15-25、査読無

石黒圭「読解とその教え方を考える」『国際交流基金バンコク日本文化センター日本語教育紀要』9 号、2012 年、pp.1-18、査読無

渡辺文生「日本語の語りの文章における視点の表現とその指導について」『山形大学大学院社会文化システム研究科紀要』9 号、2012 年、pp.51-58、査読有

宮田公治「評価文副詞「～ことに」の制約 事柄の評価に関わる形容詞の類型」『日本語文法』12 巻 2 号、2012 年、pp.128-144、査読有

〔学会発表〕(計 5 件)

宮田公治「講義の談話で頻用される言語表現 人文学系 14 講義の調査から」日本大学工学部学術研究報告会、2013 年 12 月 14 日、日本大学工学部

石黒圭・佐久間まゆみ・渡辺文生・宮田公治・宮澤太総 ワークショップ「講義の談話の単位と展開」日本語学会、2013 年 10 月 26 日、静岡大学

石黒圭(司会) 佐久間まゆみ(「発題 1 『談話型』から見た講義の談話展開」)、渡辺文生(「発題 2 『話段』から見た講義の談話展開」)、宮田公治(「発題 3 『日本語機能文型』から見た講義の談話展開」)、宮澤太総(「発題 4 『情報伝達単位(CU)』から見た講義の談話展開」)『日本語学会 2013 年度秋季大会予稿集』、pp.28-35

佐久間まゆみ「講義の『談話型』の表現と理解」筑波大学日本語教育研修会(招待講演) 2013 年 2 月 22 日、筑波大学

石黒圭「講義に現れる接続詞と接続助詞 その微妙な関係」第 4 回「東西文化の融合」国際シンポジウム(招待講演)、2012 年 6 月 17 日、大東文化会館大ホール

鈴木香子「配布資料から見る講義の談話構造と受講生の理解」第 4 回「東西文化の融合」国際シンポジウム、2012 年 6 月 17 日、大東文化会館大ホール

〔図書〕(計6件)

佐久間まゆみ(研究代表者)『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」資料集』早稲田大学大学院日本語教育研究科、2014年、308ページ

佐久間まゆみ(研究代表者)、石黒圭(編)『「大学学部留学生のための講義の談話に関する研究」論文集』一橋大学国際教育センター、2014年、146ページ

宮田公治「第3章学校文法の単位」中山緑朗他1名(監修)、沖森卓也他3名(編)『品詞別学校文法講座第1巻』明治書院、2014年、37(368)ページ

田中寛『文章表現と理解のための日本語接続機能辞用例・用法辞典(試用版)』大東文化大学応用日本語学研究会、2014年、480ページ

田中寛『複合辞で学ぶ日本語文法・接続辞編 中上級日本語文型の意味と機能』大東文化大学、2013年、274ページ

佐久間まゆみ『【言語の単位】文章・談話の分析単位』(『言語』セレクション 第1巻)大修館書店、2012年、8(335)ページ

6. 研究組織

(1)研究代表者

佐久間 まゆみ (SAKUMA, Mayumi)
早稲田大学・日本語教育研究科・教授
研究者番号: 3 0 1 5 3 9 4 3

(2)研究分担者

石黒 圭 (ISHIGURO, Kei)
一橋大学・国際教育センター・教授
研究者番号: 4 0 3 1 3 4 4 9

藤村 知子 (FUJIMURA, Tomoko)
東京外国語大学・留学生日本語教育センター・教授
研究者番号: 2 0 2 2 9 0 4 0

渡辺 文生 (WATANABE, Fumio)
山形大学・人文学部・教授
研究者番号: 0 0 2 1 2 3 2 4

宮田 公治 (MIYATA, Koji)
日本大学・工学部・准教授
研究者番号: 4 0 3 0 8 2 6 8

宮澤 太総 (MIYAZAWA, Takaaki)
大阪観光大学・国際交流学部・講師
研究者番号: 9 0 5 7 9 1 6 1

青山 文啓 (AOYAMA, Fumihiro)
桜美林大学・言語学系・教授
研究者番号: 7 0 1 8 4 0 5 9

田中 寛 (TANAKA, Hiroshi)
大東文化大学・外国語学部・教授
研究者番号: 6 0 2 0 7 1 3 1

(4)研究協力者

ザトラウスキー ポリー (SZATROWSKI, Polly) [海外協力者]
米国ミネソタ大学・言語学研究所・教授
研究者番号: なし

朴 恵燦 (PARK, Hyeyoung) [海外協力者]
韓国ソウル大学・言語教育院 言語能力測定センター・専任研究員
研究者番号: なし

鈴木 香子 (SUZUKI, Kyoko)
早稲田大学・日本語教育研究センター・非常勤講師
研究者番号: 6 0 3 6 7 1 2 5

内田 安伊子 (UCHIDA, Aiko)
早稲田大学・日本語教育研究センター・非常勤講師
研究者番号: なし

恵谷 容子 (EYA, Yoko)
早稲田大学・日本語教育研究センター・非常勤講師
研究者番号: なし

田中 啓行 (TANAKA, Hiroyuki)
早稲田大学大学院・日本語教育研究科・研究生
研究者番号: なし

伊能 裕晃 (INOUE, Hiroaki)
東京学芸大学・留学生センター・非常勤講師
研究者番号: なし

湯浅 千映子 (YUASA, Chieko)
早稲田大学大学院・日本語教育研究科・博士後期課程大学院生
研究者番号: なし

李 婷 (LI, Tei)
早稲田大学大学院・日本語教育研究科・博士後期課程大学院生
研究者番号: なし

青木 優子 (AOKI, Yuko)
早稲田大学大学院・日本語教育研究科・助手
研究者番号: 9 0 7 2 4 6 9 1

田口 みゆき (TAGUCHI, Miyuki)
早稲田大学大学院・日本語教育研究科・博士後期課程大学院生
研究者番号: なし